

近代哲学とフッサール現象学

——一九一二年夏季期の講義に基づいて——

堀 栄 造

本論は、フッサールの未公開の遺稿BⅡ19所収の一九一二年夏季期の講義に基づいて、一九一二年時点のフッサール現象学の形成が近代哲学によってどのような影響を受けたのかを明らかにしようとするものである。その際に、ここで取り上げられる近代哲学者は、デカルト、ロック、ヒューム、カントである。

フッサールは、一九一二年夏に『イデーニー』を構想し始め、一九一二年九月には鉛筆書き草稿を執筆し始める。それゆえ、一九一二年夏季期の講義は、一九一三年公刊の『イデーニー』の基本的立場を生々しく論述するものであり、しかも、そのテーマは、現象学的還元である。したがって、一九一二年夏季期の講義は、『イデーニー』において一応体系化された形を取るフッサールの現象学的還元が近代哲学の影響下でどのように形成されたのかを知ることができる重要な資料だと言える。

一、近代哲学に対する基本的立場

一九一二年夏季期の講義に関する考察に入る前に、一九一二年時点前後のフッサールの著作等を踏まえて、近代哲学に対するフッサールの基本的立場の概観を描いておこう。

『イデーニー』における現象学の哲学史的^①位置づけに関するフッサールの自己理解によれば、現象学は、近代哲学全体のひそかな切望である。そして、その切望は、驚くほど深遠なデカルトの基礎考察の中でもはや現象学へ押し迫るものであり、ロックの流れを汲む心理学主義においてヒュームは眩惑されながらもほとんどもはや現象学の領域に足を踏み入れるのである。さらに、カントは、ますます現象学の領域を覬取しているのだが、まだこの領野をわがものとしていないということになる。したがって、フッサールによれば、現象学は、

近代哲学の父と仰がれる大陸合理論の先駆者デカルト、イギリス経験論のロックやヒューム、ドイツ観念論の先駆者カントといった近代哲学全体によってひそかにめざされ必然的に生み出された所産であるという哲学史的位置づけを被る。

フッサールは、デカルトに始まり、ロック、ヒュームを経てカントへ至る近代哲学の系譜は必然的に現象学の登場へ帰着すると見ているわけである。フッサールは、例えば『論理学研究』第二巻の補遺において、デカルトが精神 [mens] と物体 [corpus] を峻別したあとで、ロックが感覚 [sensation] と反省 [reflexion] という名称の下で二つの対応する知覚類型である外的知覚と内的知覚を近代哲学へ導入した、というふうにデカルトとロックの哲学史的意義を捉えている。つまり、フッサールは、デカルトが精神と物体を峻別して意識という絶対的に確実な存在領域を開示した点にデカルトの哲学史的意義を見いだすのであり、ロックが精神ないし心が自己自身の活動 (デカルト的な意味でのコギタチオネス) について所有する知覚としての内的知覚を開示した点にロックの哲学史的意義を見いだすのである。そして、フッサールは、例えば一九〇七年夏学期の講義『現象学の理念』において、ヒュームの心理学は、顕在的な印象や観念のすべての超越作用を虚構へ降格させることに自己の目標を向けるけれども、習慣、人間性、感覚器官、刺激、等々の名称の下で超越的な現存を

扱っている、^⑤ というふうにヒュームの哲学史的意義を捉えている。つまり、フッサールは、ヒュームがその徹底した懐疑の下でロックの内的知覚を虚構の中へ入れることによってその超越性 (実在性) を脱却しようとしたにもかかわらず失敗に終わった点にヒュームの哲学史的意義を見いだすのである。さらに、フッサールは、例えば『論理学研究』第一巻において、カントの認識論は、心理学主義を乗り越えようとするが、実際乗り越えてもいるような側面をもつているが、また、心理学主義に陥るようなきわめて顕著な側面をもつている、^⑥ というふうにカントの哲学史的意義を捉えている。つまり、フッサールは、カントがヒュームまでの経験的超越的次元を脱却する超越論的次元を開示しようとしたにもかかわらず不完全に終わった点にカントの哲学史的意義を見いだすのである。したがって、フッサールの自己理解に従えば、『イデーニエ』における現象学は、近代哲学のうちに潜む必然的な歴史的展開の結末として哲学史的に位置づけられる。

一九一二年時点前後のフッサールの近代哲学に対する基本的立場は、最晩年の『危機書』においても変わらない。『危機書』におけるフッサールは、デカルトの意義をエポケーによる純粹自我の獲得に見いだし、^⑦ ロックの意義を内的経験に基づく内部心理学的分析に見いだし、^⑧ ヒュームの意義を世界一般の虚構化に見いだし、^⑨ カントの意義を超越論的次元の開

示に見いだしている。¹¹⁾

ただし、本論において問題となるのは、一九二二年時点のフッサール現象学の形成が近代哲学によつてどのような影響を受けたのかということである。本論は、これから、一九二二年時点のフッサール現象学がデカルト、ロック、ヒューム、カントと続く近代哲学を踏まえつつそれらを批判的に克服しようとして形成されたことを明らかにしなければならない。

二、デカルトの批判的克服

第一節で見たように、デカルトの哲学史的意義は、デカルトが精神と物体を峻別して意識という絶対に確実な存在領域を開示した点であった。その点に関して、フッサールは、一九二二年夏学期の講義においてどのように見ているのであるか。

一九二二年夏学期の講義において、フッサールは、デカルトによる「意識という絶対に確実な存在領域の開示」を「デカルト的還元」あるいは「方法的懐疑的還元」と呼び、その欠点を次のように指摘する。つまり、デカルト的還元によつて外的実在は遮断されるが、自分自身の認識論的に反省する自我の実在は遮断されないとすることである。さらに、デカルトは、自分自身の自我の実在措置を遮断することをしない

ままだったという点で失敗したばかりでなく、純粹な還元においてではないにせよ自分が突き当たったコギタチオの領野が固有の研究領野であり、それどころか究極の学問へ（唯一の正当な意味での絶対的学問へ）向けられるあらゆる研究の本来の領野であるということに全く気づかなかつたという点でも失敗したということである。¹²⁾

したがつて、デカルトに対するフッサールの批判点は、自分自身の認識論的に反省する自我の実在措置の遮断の欠落であり、その結果純粹な還元によつて純粹意識の現象学的領野となるはずのコギタチオの領野の眞価を見逃したという点である。そこで、フッサールは、「デカルトは思惟される実体を保持してはならなかつたのであり、コギタチオネスを越えてはならなかつたのであり、あらゆる超越する実在の統覚の排除後に初めて内在的に確定しうるものをコギトという題目の下に認めてはならなかつたのである」と言う。つまり、フッサールによれば、デカルトは經驗的統覚の遮断を怠つたのであり、その結果コギトの実在的次元から純粹な還元を経た獲得される純粹意識の現象学的次元へ到達しえなかつたというわけである。

ベルネ、ケルン、マールバッハは、一九〇六年時点のフッサールが「デカルトのエゴ・コギトへの革命的な帰還をたどえどなんに模範的なものとして評価したとしても、デカルト

自身がエゴ・コギトをなお「世界の一端」として理解し、純粹な超越論的主観性を逸したということとは、やはり絶えずフッサールの批判点であった」というふう述べて、コギトの實在的次元から純粹意識の現象学的次元へのデカルトの不到達が一九〇六年時点のフッサールにとつての批判点であることを指摘している。しかし、本論によつて、一九一二年夏学期時点のフッサールがデカルトの還元の批判的克服を明確に認識し、批判内容を實質的に明瞭に叙述していたことが、明らかとなつた。

それゆゑ、フッサールにとつてのデカルトの意義は、「デカルトがコギトへの帰還を以て現象学の地盤へ導くが、実際に到達しはしない」ということであり、デカルトが方法的懐疑的還元によつてコギタチオの領野を開示したものの經驗的統覚の遮断の欠落を露呈したということである。そして、經驗的統覚の遮断の欠落というデカルトの欠陥を克服しようとして、フッサールは、現象学的エポケーを着想することになるのである。

三、ロックの批判的克服

第一節で見たように、ロックの哲学史的意義は、ロックが精神ないし心が自己自身の活動（デカルト的な意味でのコギ

タチオネス）について所有する知覚としての内的知覚を開示した点であつた。その点に関して、フッサールは、一九一二年夏学期の講義においてどのように見ているのであろうか。

一九一二年夏学期の講義において、フッサールは、ロックの心理学的反省を自己の現象学的反省から區別している。つまり、ロックの心理学的反省は、自然的態度で經驗的實在として把握し措定する自己の体験に対して内的知覚や内的經驗を遂行するものであり、それがたとえ反省的態度であるにせよ自然的態度に他ならないのであり、現象学的エポケーの行使によつて自然的で素朴な實在措定を遮断するフッサールの現象学的反省から區別されねばならないのである。

それでは、フッサールの現象学的反省とは、具体的にはどのようなものなのか。それに関して、フッサールは、一九一〇年十一月の草稿において次のように述べている。「空間や時間における諸事物を伴うその他の自然のあらゆる措定が働きの外へ置かれ、その下ではまた自分自身の身体および体験の身体に対する心理物理的関係の措定も働きの外へ置かれるばかりでなく、身体と結び付けられて人格として考えられる經驗的自我の措定もまた働きの外へ置かれるのであり、あらゆる他の經驗的自我の人格ばかりでなく自分自身の經驗的自我の人格もまた働きの外へ置かれる。ひとが現象学的還元を首尾一貫して完全に遂行し、心理的体験の内在的記述の際に

この心理的体験を全くもはや体験する自我の状態として、(体験)として、そして客観的時間における存在として統攝し措定しないときに初めて、ひとは現象学的知覚の客観として純粹体験を獲得し、經驗的知覚とはラディカルに異なる形で眞つ先に真正正銘の現象学的知覚を遂行する」。

したがって、一九一二年夏学期の講義において、フッサールの現象学的反省が現象学的エポケーの行使によって自然的で素朴な實在措定を遮断すると言われているのは、現象学的エポケーの主導による現象学的還元⁽²⁾の遂行によって心理的体験が經驗的實在的次元から解放されて現象学的知覚の客観としての純粹体験(純粹意識としての現象)となることを意味している。それに対して、ロックの心理学的反省における心理的体験の知覚である内的知覚や内的經驗は、經驗的實在的次元における經驗的知覚に止まる。

ただし、フッサールの現象学的反省はロックの心理学的反省を踏まえて生み出されたとすることが、留意されなければならない。フッサール自身、一九一二年夏学期の講義において次のように述べている。「第一にあらゆる心理的物理的實在の括弧入れつまり精神や自然の括弧入れについて言及することなしに、我々は、純粹意識へ全く達しない。我々は、心理的体験から出発してこうした還元⁽³⁾を行使し、還元の際にエポケーによって我々にとつて残存するものを問うことを獲

得する」⁽⁴⁾。つまり、フッサールの現象学的反省における研究対象となる純粹意識が、ロックの心理学的反省における研究対象となるような心理的物理的實在としての精神や自然の括弧入れによって獲得され、フッサールの現象学的還元⁽⁵⁾の行使が、ロックの心理学的反省において問われるような心理的体験から出発することを、フッサール自身が認めているわけである。

フッサールは、「現象学的態度は、意図的 [künstlich] 態度であるかぎりで或る意味で不自然な [unnatürlich] 態度であり、確かに他の態度を前提する二次的態度である。我々は、エポケーという方法によって現象学的態度を前以て与えられた非現象学的態度にのみ基つける」と述べているが、フッサールの現象学的態度は、ロックの心理学的態度のような素朴な自然的態度つまり前以て与えられた非現象学的態度を踏まえてのみ生み出されるのである。そうした意味で、フッサールの現象学的反省は、ロックの心理学的反省を踏まえてのみ生み出されたとと言える。

ベルネ、ケルン、マールバッハは、一九二五年の講義『現象学的心理学』に基づいて、「心的生の志向性の最も普遍的な本質性が内的經驗(反省)の明証から直接的に汲み取られ、(多様な証示可能な形式と帰属する総合において遂行される能作)として記述的に明らかになるということ」を以て、

フッサールが自己の現象学にとつての意味において自己によつて高く評価されるロックからヒュームへ至る伝統を把握していることを、指摘している。しかし、本論によつて、一九一二年夏学期時点のフッサールが既にロックの心理学的反省の批判的克服を明確に認識し、しかも、フッサールの現象学的反省がロックの心理学的反省を踏まえて生み出されたことを具体的に叙述していたことが、明らかとなつた。

それゆゑ、フッサールにとつてのロックの意義は、内的知覚を手法とする心理学的反省を開示したもののそれが取る自然的態度という素朴さを露呈したということである。そして、自然的態度という素朴さの露呈というロックの欠陥を克服しようとして、フッサールは、現象学的知覚を手法とする現象学的反省を着想することになるのである。

四、ヒュームの批判的克服

第一節で見たように、ヒュームの哲学史的意義は、ヒュームがその徹底した懐疑の下でロックの内的知覚を虚構の中へ入れることによつてその超越性（實在性）を脱却しようとしたにもかかわらず失敗に終わった点であつた。

フッサールから見れば、ヒュームがその徹底した懐疑によつて心理学的反省を虚構の中へ入れたことは、心理学的反

省の超越性（實在性）からの脱却の可能性を秘めていることを意味した。しかし、フッサールは、一九一〇年十一月の草稿において、そうした可能性が現実性とはならなかつたことを次のように述べている。「我々は、ヒュームの實在的区別「[disjunctio realis]」という意味での抽象、或る具体的なものの本質的に非独立的で分離不可能な諸契機②の区別という意味での抽象を遂行することなく、思惟と事物の間の経験的関係を描ちうる」。つまり、ヒュームによつて心理学的反省が虚構の中へ入れられたにもかかわらず、具体的な心理学的反省内容に対しては實在的区別という意味での抽象が遂行され、心理学的反省の超越性（實在性）からの脱却が実現されていないというわけである。

ヒュームの心理学的反省のそうした不完全性を克服するためには、思惟と事物の間の経験的関係を断たねばならない。そこで、フッサールは、現象学的反省へ転換して現象学的区別「[disjunctio phenomenologica]」を遂行すれば体験とあらゆる事物的現存の間の経験的結び付きを矛盾なく断ちうるとうのである。体験をその経験的関係において考察することなく体験そのものを考察しうるためには、ヒュームの虚構をフッサールの純粹空想へ転換しなければならぬ。フッサールの現象学的反省は、「反省を純粹空想の中へ入れることによつて超越性（實在性）からの脱却を実現するのであり、空

想における反省に他ならない。

フッサールは、一九二二年夏学期の講義においても、ヒュームの實在的區別を遂行することなく現象学的區別を遂行すべきであることに言及しているが、現象学的區別とは具体的にどのようなものなのか。それに関連して、フッサールは、一九二二年夏学期の講義において次のように述べている。「私は、ファントム [Phantom] という実的要素のあらゆる確定に対して現出的 [phanaisch] という表現をよく用いるし、ファントムという実的要素が与えるものとしての、そして所有するものとしての実的要素全体とみなされるかぎりで、私はコギタチオそのものを現出 [phanais] と呼ぶ」。つまり、現象学的區別とは、現象学的還元によって現象となった現出としての体験そのものの諸契機を現象学的反省の現場で區別することであり、超越性(實在性)を脱却した現象としての現出の現象学的要素は、ヒュームにおけるように實在的 [real] ではなく実的 [reell] である。

ベルネ、ケルン、マールバッハは、ヒュームの懐疑的論証が、「フッサールの中に、彼の哲学の理念にとつて全く決定的な(超越論的転換)をまさしく爛り立てたように思われる。つまり、フッサールは、懐疑そのものうちに(超越論的転換)の隠された超越論的動機付けを見いだしたのであり、超越論的動機付けを首尾一貫して影響力をもつものとした」と

指摘している。しかし、本論によつて、一九二二年夏学期時点のフッサールが既にヒュームの虚構の批判的克服を明確に認識し、ヒュームの實在的區別に代わる現象学的區別を具体的に叙述していたことが、明らかとなった。

それゆえ、フッサールにとつてのヒュームの意義は、心理学的反省の超越性(實在性)を脱却しようとして虚構を開示したものの實在的區別の遂行に止まったことである。そして、實在的區別の遂行に止まったというヒュームの欠陥を克服しようとして、フッサールは、純粹空想を着想し、現象学的區別が遂行される実的な現象学的領野を獲得するのである。

五、カントの批判的克服

第一節で見たように、カントの哲学史的意義は、カントがヒュームまでの経験的超越的次元を脱却した超越論的次元を開示しようとしたにもかかわらず不完全に終わった点であった。

ヒュームがあくまでも経験論的立場に止まっていたのに対して、カントは、哲学史上初めて経験的認識の可能性の条件としての経験的認識成立の超越論的(先験的)枠組みを探究するという超越論的立場を切り開いた。カントの認識論は、

經驗的次元に先行する超越論的（先驗的）次元を開示したかぎりで心理学主義を乗り越えるような側面をもっているが、他方で、經驗的實在的次元を遮断することなく經驗的實在的地盤を踏まえて超越論的（先驗的）本質を洞察したかぎりで心理学主義に陥るような側面をもっている。したがって、フッサールは、カントによつて超越論的（先驗的）次元への眼を開かれながらも、經驗的實在的次元を遮断して超越論的意識の本質を探究するという独自の超越論的現象学的立場を切り開いたのである。

カントによつて超越論的次元への眼を開かれたフッサールは、具体的には自己の現象学のうちでどのような問題から超越論的関心に目覚めたのであろうか。それは、意識の相関者をめぐる問題である。それに関連して、フッサールは、一九一二年夏学期の講義において次のように述べている。「究極の観点で、相関者は、対象意識の实的部分として把握され、箱の中の物のように意識の中にあつて意識の中で外的対象の代理をするような意識における实的内在的客観として把握された。……ひととは、それを思念したのである。それと、我々は、我々の箱を越え出ることとはできないからであり、……」。つまり、意識内在主義を取つていた一九〇六／〇七年時点までのフッサールの立場からすれば、意識の相関者は、意識という箱の中の实的内在的客観として把握

されるものであり、意識作用の統握によつて意味を付与されるものだったのである。

しかし、世界経験主義（意識が自己を超越した外部世界と相関するという事態を分析対象とする世界経験の現象化としての超越論的現象学的還元の立場）へ転換する一九〇六／〇七年時点以降のフッサールの立場からすれば、意識の相関者は、意識と世界の相関という視点から超越的対象の存在性を反映する存在の意味 [ontischer Sinn] を含意するものでなければならぬ。そうすると、そこには、コギタチオのうち実際に含まれるもの、つまりコギタチオに現出 [Phänis] として属するものと、コギタチオの相関者という事象 [Sache] であるものとの区別が生じる。つまり、それは、实的内在と志向的内在の区別であり、コギタチオの实的成素と概念的 [ideell] 成素との区別とも言える。そして、この概念的成素（实的内在としての作用と相関するノエマとしての非實在的な概念的存在）は、意識内在主義における概念的 [ideell] 成素（統握作用によつて付与される統握意味としての概念的存在）ではなく、存在の意味を含意するものである。

フッサールの超越論的関心は、意識内在主義から世界経験主義への転換点で目覚めるのであり、まさに意識の相関者の概念的成素から概念的成素への転換点で目覚めるのである。そして、超越論的関心に目覚めた際のフッサールの思いが、

一九一二年夏学期の講義において次のように自己批判的に語られる。「しかし、一切は、不十分な分析や記述から生じ、少なくとも純粹現象学的な態度や方法における不十分さから生じる誤りである」。つまり、一九一二年夏学期の講義において、フッサールは、意識内在主義の立場を取っていた時点では実的内在と志向的内在の区別がなされなかったという自己の誤りを認めるのである。

ベルネ、ケルン、マールバッハは、一九二三／二四年の講義『第一哲学』ないし最晩年の『危機書』に基づいて、「フッサールは、カントを次のように非難する。つまり、カントは、〈ヴォルフ的存在論に由来し、……超越論的哲学においても常に本質的に存在論的に方向づけられて〉おり、〈能作する主観性とその意識機能の具体的に直観的な相関的研究の体系的遂行は、……自己の問題を処理するのには不要だ〉とみなした」と指摘している。しかし、本論によって、一九一二年夏学期時点のフッサールが既にカントの超越論的次元の開示の批判的克服を明確に認識し、世界と相関する超越論的意識の問題をめぐって実的内在と志向的内在の区別について明瞭に叙述していたことが、明らかとなった。

それゆえ、フッサールにとつてのカントの意義は、カントが超越論的次元を開示したものの世界と相関する超越論的意識の問題を不問に付したということである。そして、世界と

相関する超越論的意識の問題を不問に付したというカントの欠陥を克服しようとして、フッサールは、実的内在と志向的内在の区別を着想し、超越論的現象学を構築するのである。

以下に、フッサールが超越論的現象学を構築していく過程の概観を簡潔に提示しておこう。

フッサールは、一九〇八年十二月頃から超越論的還元を形成し始める。一九〇九年夏あるいは初秋の時点で、再現前化（準現在化）から再生への空想概念の転換が遂行される。一九〇九年九月時点で、内在的再生の問題を執拗に問うことによつて深化した空想における反省を含蓄する内的空想という概念へ到達される。一九一〇年時点で、超越論化の基軸となる非顕在性という概念が登場して、超越論的現象学的反省とその結び付きが予想されるものとなる。一九一一年あるいは一九一二年初めの内的意識概念と内的反省概念の獲得によつて、基底としての再生とそれとは位相を異にする反省的把握という超越論的現象学的反省の根本的枠組みが確立される。

結 び

以上のように、本論は、一九一二年夏学期の講義に基づいて、一九一二年時点のフッサール現象学がデカルト、ロック、ヒューム、カントと続く近代哲学を踏まえつつそれらを批判

的に克服しようとして形成されたことを明らかにした。

つまり、まず、デカルトは、フッサールに対してコギタチオの領野を開示して見せる一方で、経験的統覚の遮断の欠陥という自己の欠陥を露呈することによって、結果的にフッサールの現象学のエポケーの着想を招くこととなった。また、ロックは、フッサールに対して内的知覚を手法とする心理学的反省を開示して見せる一方で、それが取る自然的態度の素材さという自己の欠陥を露呈することによって、結果的にフッサールの現象学的知覚を手法とする現象学的反省の着想を招くこととなった。そして、ヒュームは、フッサールに対して虚構を開示して見せる一方で、実在的区別の遂行に止まるという自己の欠陥を露呈することによって、結果的にフッサールの純粹空想の着想を招くこととなった。さらに、カントは、フッサールに対して超越論的次元を開示して見せる一方で、世界と相関する超越論的意識の問題を不問に付したという自己の欠陥を露呈することによって、結果的にフッサールの実在的内在と志向的内在の区別の着想を招き、フッサールを超越論的現象学の構築へ向かわせることとなった。したがって、フッサールは、『イデーナI』において一応体系化された形を取る現象学的還元の際に四人の近代哲学者たちによって四つの角度から影響を受けたことが、一九一二年夏学期の講義に基づいて明らかにされる。

まず、第一に、フッサールは、デカルトが開示した意識という絶対には確実な存在領域を踏まえて純粹意識という現象学的領野を獲得したのであり、研究領野の獲得という角度から影響を受けたものと言える。

また、第二に、フッサールは、ロックが開示した内的知覚という心理学的反省の手法を踏まえて現象学的知覚という現象学的反省の手法を確立したのであり、把握方法の確立という角度から影響を受けたものと言える。

そして、第三に、フッサールは、ヒュームが開示した心理学的反省の虚構を踏まえて純粹空想を構築し、反省現場を実在の世界から非実在の世界へ転換することによって反省現場をいわば純化したのであり、反省現場の純化という角度から影響を受けたものと言える。

さらに、第四に、フッサールは、カントが開示した超越論的次元を踏まえて世界と相関する超越論的意識の次元を発見し、自然的態度の平面の生の位相から超越論的態度の深みの生の位相へ究明位相をいわば深化したのであり、究明位相の深化という角度から影響を受けたものと言える。

注

(1) 本論におけるフッサールの未公開の遺稿B II 19からの引用については、ベルギーのルーヴァン大学付属フッサールアルヒーフより

許可を得た。

- (2) Vgl. Husserl-Chronik: Denk- und Lebensweg Edmund Husserls, hrsg. v. K. Schuhmann, Husserliana, Dokumente Bd. I, 1977, S.171.
- (3) Vgl. *ibid.*, S.172.
- (4) Vgl. Husserl, E., Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, hrsg. v. K. Schuhmann, Husserliana, Bd. III/1, 1976, S.133.
- (5) Vgl. Husserl, E., Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Zweiter Teil, Untersuchung zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis, hrsg. v. U. Panzer, Husserliana, Bd. XIX/2, 1984, S.752.
- (6) Vgl. Husserl, E., Die Idee der Phänomenologie, Fünf Vorlesungen, hrsg. v. W. Biemel, Husserliana, Bd. II, 2Aufl., 1958, S.20.
- (7) Vgl. Husserl, E., Logische Untersuchungen, Erster Band, Prolegomena zur reinen Logik, hrsg. v. E. Heinenstein, Husserliana, Bd. XVIII, 1975, S.102, Anm. 3.
- (8) Vgl. Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, hrsg. v. W. Biemel, Husserliana, Bd. VI, 2 Aufl., 1976, S.63, 64, 74, 77, 80.
- (9) Vgl. *ibid.*, S.86 f.
- (10) Vgl. *ibid.*, S.90, 100.
- (11) Vgl. *ibid.*, S.102, 117.
- (12) Vgl. B II 19, S.57 (S.30a), 以下、トランスクリプションの頁を先に掲げ、原頁を()で示す。
- (13) Vgl. *ibid.*, S.59 (S.30b).
- (14) Vgl. *ibid.*, S.61 (S.31b).
- (15) *Ibid.*, S.64f. (S.32b u. S.33a).
- (16) 拙著「フッサールの現象学的還元」(晃洋書房、二〇〇三年)の九七頁以下を参照。フッサールは、一九〇四/〇五年時点で現象学的反省を「論理学研究」におけるそれから内的時間意識の現象学的ににおけるそれへ転換し、そうした事態の背後で現象学的還元を着想する。「論理学研究」における現象学的反省は、経験的自我たる精神的自我を反省的分析のサンプルとして内的意識の中に置き、内的知識の顕在の対象とするものであり、心理学的次元から現象学的アイデア学的次元へ転換したもののまだ実在的次元に止まるものであり、その経験的統覚は遮断されていない。しかし、「論理学研究」(公刊直後の一九〇三年ないし一九〇三年頃のフッサールは、「論理学研究」における記述的心理学含意としての現象学とは異なる。新たな現象学が経験的統覚の遮断を含意したものでなければならぬ)に気づく。そこで、一九〇四/〇五年時点のフッサールは、現象学的反省を実在的次元から脱却したものにし、経験的統覚を遮断したものにすることを、内的時間意識の分析における現象学的反省としての空想における反省を舞台装置とする現象学的還元を着想する。つまり、フッサールは、現象学的反省の次元を実在的次元から空想的次元へ転換することによって、経験的統覚を遮断した純粹な現象学的反省を確保しようとしたわけである。けれども、一九〇五年時点の現象学的還元は、現象学的反省の実在的次元からの脱却をかなり推進したものの、反省的分析対象に対する現象学的把握は顕在的であり、現象学的反省の実在的次元からの脱却は、不完全であった。それゆえ、一九〇六/〇七年時点のフッサールは、顕在的な現象学的把握としての現象学的知識から、非顕在的な現象学的把握としての空想直観へ現象学的把握を転換することによって、現象学的統覚を確立し、実在的次元からの完全な脱却を成就する現象学的反省を確立する。
- (17) Bernett, R./Kern, I./Marbach, E., Edmund Husserl——Darstellung seines Denkens, Hamburg, Reprinted 1996 (First published 1989), (以下「Bernett 文庫」), S.64 f.
- (18) B II 19, S.64 (S.32b).
- (19) 拙著「フッサールの現象学的還元」の一〇〇頁以下を参照。一九〇六/〇七年時点の現象学的還元は、経験的統覚を完全に遮断した純然たる現象学的統覚という契機を含んでいる。そして、それ

を可能にする現象学者の態度は、批判的態度と呼ばれる。つまり、反省のまなざしが実在性を完全に扨拭しきれてはいないような一九〇五年時点の現象学的反省の態度が現象学的態度と呼ばれるのに対して、反省のまなざしが実在性を完全に扨拭するやうな現象学的反省の態度が批判的態度と呼ばれるのである。批判的態度は、「エポケー（判断中止）」と反省の内容の非現存化つまり現象化という二つの契機を含んでおり、この一九〇六／〇七年時点のエポケーの着想は、反省領域全体の中立化の成就という問題と重なり合っている。したがって、一九〇五年に成立した空想における反省としての現象学的反省は、一九〇六／〇七年に反省領域全体の中立化を成就して、完全に実在的次元を脱却した現象学的反省として確立されるわけである。

- (20) Vgl. B II 19, S.46f. (S.24b).
- (21) Husserl, E., Zur Phänomenologie der Intersubjektivität. Texte aus dem Nachlass, Erster Teil: 1905-1920, hrsg. v. I. Kern, Husserliana, Bd. XIII, (西澤「Hua. XIII, A」), 1973, S.149f.
- (22) Vgl. B II 19, S.47 (S.25a) u. S.83 (S.41a).
- (23) Vgl. Hua. XIII, S.149.
- (24) B II 19, S.83 (S.41a).
- (25) Ibid., S.84 (S.41b).
- (26) Bernat., S.70.
- (27) 拙著「フッサールの現象学的還元」の一〇五頁以下を参照。一九〇五年時点のフッサールは、「論理学研究」における現象学的反省としての内的意識における内的知覚から、内的時間意識の分析における現象学的反省としての空想における反省へ転換する。空想における反省とは、現象学者が空想しつつ空想カプセル内に詰め込まれたサンプル的体验としての分析対象を反省することである。一九〇五年時点の現象学的反省における分析対象に対する現象学的把握は、現象学的知覚と呼ばれる。現象学的知覚は、個別的事例の分析が行われる顕在性の次元に存するのであり、現象学

的反省が実在的次元を完全に脱却するためには、範例的分析を可能にする非顕在性の次元に存する現象学的把握としての空想直観へ転換しなければならない。

- (28) Hua. XIII, S.143.
- (29) Vgl. ibid., S.144.
- (30) 拙著「フッサールの現象学的還元」の七八頁以下を参照。一九〇五年二月時点で、空想における反省の空想にふさわしい単なる空想つまり純粹空想が見いだされる。フッサールは、一九〇四年頃から反省の可能性の探究を遂行し、その延長線上の一九〇五年四月時点で空想における反省を分析する際に現象学的還元を着想する²⁹⁾。
- (31) Vgl. B II 19, S.14 (S.9b).
- (32) B II 19, S.100 (S.48b).
- (33) Bernat., S.61.
- (34) 拙著「フッサールの現象学的還元」の七四頁以下を参照。フッサールは、一九〇五年二月時点で、空想における反省の空想にふさわしい単なる空想を見いだす。それは、純粹空想固有の空想変様つまり中立性変様の可能性を暗示するものである。中立性変様とは、現象学者が反省的分析対象としての空想内容を中立的に変様することであり、サンプルとしての空想内容の不変の本質を把握するための具体的操作である。したがって、内的時間意識の分析における現象学的反省つまり反省対象と反省者を異なる位相によって絶対的に仕切る空想における反省にとつて、中立性変様の可能性を秘めた単なる空想は、不可欠のものなのである。
- (35) B II 19, S.97 (S.47a).
- (36) 拙著「フッサールの現象学的還元」の九六頁以下を参照。一九〇七年時点での志向の構成の主観化によって実的内在と志向的内在という対立図式が成立し、存在の現象への対象の現象学的還元によって空想における反省の空想カプセル内の作用と相関する対象は存在性をもつ対象となる。この時点以前においては、超越的対

象は現象学的分析の射程から除外されていたのだが、一九〇七年時点の存在現象への対象の現象学的還元によって、超越的对象の存在性が現象学的に還元されて現象学的分析の射程に取り込まれることになる。それは、一九〇七年時点以前の意識内在主義（体験内在主義）の打破を意味する。つまり、一九〇七年時点で、意識内在主義（体験内在主義）から世界経験主義への転換が、開始されるのである。

- (37) 同書の一二三頁以下を参照。一九〇七年時点の志向的構成と存在現象への対象の現象学的還元を踏まえて、一九〇八年時点で、範疇的对象における述定対象の内含をその核心とする意味論の領域における現象学的還元が遂行され、超越論的還元への方向性が開かれることになる。超越論的還元は、超越的なものを現象学的射程に収めるということであり、意識が自己を超越した外部世界と相関するという事態の現象化つまり世界経験の現象化を意味する²⁰。

(38) Vgl. B. II 19, S.108 (S.52a).

(39) Vgl. *Ibid.*, S.108f. (S.52a).

(40) *Ibid.*, S. 97 (S.47a).

(41) *Bernet*, S.69.

(42) 拙著『フッサールの現象学的還元』の二三四頁以下を参照。

（ほり・えいぞう 大分工業高等専門学校校助教授）